

若者たちと商人はヴェニスで

作 篠原久美子

【背景】

ウィリアム・シェイクスピア作『ヴェニスの商人』（小田島雄志訳）を基に、裁判前日にアントーニオがシャイロックの家を訪ねたという架空の設定に基づいて書かれています。

【登場人物】

アントーニオ ヴェニスの商人 坂上善樹

シャイロック 金持ちのユダヤ人 大鷹明良・剣持直明

【場面】

ヴェニス シャイロックの家 一場のみ。

ノックの音。

シャイロック これはこれは。キリスト教徒のお偉い旦那様が犬小屋になんの御用で？

しかもこんな時間に？ 夜中に目が覚めて、「しまった、今日は日課のユダヤ人に唾を吐くの忘れていた」と思い出されてわざわざいらして下さったとでも？
俺の髭に唾を吐き足蹴にするために？

アントーニオ 中に入れてもらおう。

シャイロック （中に入れず）牢番はどうした？

アントーニオ 受けた恩義を忘れずにいてくれた男だ。同情心も篤い。

シャイロック 職務怠慢だ、反逆罪だ！ 被告を逃がしただと、裁判は明日だというのに。

小僧を起こして太守に知らせねば。

アントーニオ （外に出さず）俺は誓った、明日の朝までには戻ると。そして俺は誓いを破らない男だ。

シャイロック 知っていて出したのか、牢番は。お前がここに来ることを。

アントーニオ 口が裂けても言うものか、まっとうなキリスト教徒が足を向ける場所ではない。

シャイロック 小僧はどうした、取次の。

アントーニオ 急ぎの用だと駄賃をはずんだらすんなりここまで入れてくれた。俺が誰だか分からなかったらしい。

シャイロック あのだらしない小僧め。役立たずのろまのできそこないめ！

アントーニオ だが口は堅そうだ。

シャイロツク 仕事ができないくせにプライドが高く頑固者だ、始末におえん。おい、無一文と聞いたが、小僧を買収する金がよくあったな。

アントーニオ はずんだよ実際。決して人には知られたくないからな。シャイロツク 世間体が気になるなら、もとより犬小屋になぞ足を踏み入れなければよいものを。

アントーニオ 同感だ。だが残念ながら憂き世のならいだ。したくもないことをせねばならぬのは。

シャイロツク 命が惜しけりや犬畜生にも頭を下げるかね、キリスト教徒は？

アントーニオ 見くびるなよ。ヴェニス商人を。正当な取引と正しい商売はするが、名誉を傷つけるような駆け引きは断じてしない。たとえ命のためであってもだ。覚えておけ。

シャイロツク (独白) これだからキリスト教徒はやっかいだ。ミソサザイの肝っ玉しかない奴でもカッコーくらいに格好つけやがる。(アントーニオに) これは失礼した。では、なんの御用で来なすった？ 裁判の前日に夜の闇を縫って、わざわざユダヤ人の家にお茶を飲みに来たとしても？

アントーニオ 確かめに来た。お前にひとかけらの憐みの情もないことを。

シャイロツク 生憎金貸しの商売では扱っておりませんでね。

アントーニオ それを聞いて安心した。(去ろうとし)

シャイロツク 待て。どういう意味だ。

アントーニオ 言葉通りだ。

シャイロツク 待て。何を企んでいる？

アントーニオ 何も。

シャイロツク 待て！ 入ってもらおう、中に。

アントーニオ もう用は済んだ。

シャイロツク 「俺はお宝を持っている！」、と、敵の前で言う金持ちがいると思うかね。

アントーニオ 憐みは人の宝と知っているのか、お前が？

シャイロツク 敵に見せないからといって持っていないわけでもないさ。お前が知らないことを一つ教えてやろう。ユダヤ人も人間だ。

間。ほんの一瞬の。

アントーニオ 確かに、お前の娘は人間だ。だからキリスト教に改宗した。

シャイロツク キリスト教徒だけが人間か！

アントーニオ いいや。すべて人は神の創りたもう子らだ。

シャイロツク ジェシカを返せ！ 俺の娘を！

アントーニオ お前の娘は愛を知っていた。だからキリスト教徒を愛しお前を捨てた。ロ

レンゾーは誠実な男だ。

シャイロック キリスト教徒め！

アントーニオ お前だとして神の創りたまひしものならば生まれた時には持つてもいたろう
人を憐れむたまものを。だが人に見せてはもつたいないとばかりに分厚い金庫に
しまいこみ、鍵もどこかに消え失せたのだ、永遠に。

シャイロック 探してみるか？

アントーニオ 錆びついて使い物にはならないだろうさ。

シャイロック ある、と言ったな。

間。ほんの一瞬の。

シャイロック 入れ。待て。ナイフは持っていないか？

アントーニオ 爪やすり一つ持つてはいない。

シャイロック 待て。靴を脱げ。上着もだ。入れ。

シャイロック、アントーニオを招き入れる。

アントーニオ、中に入る。

テーブルの上の薬草や乳鉢などを見て。

アントーニオ これは、薬草か？ 毒薬でも作っていたのか？

シャイロック 俺が飲むのだ。最近いささか気鬱でね。

アントーニオ 憂鬱なのか？ お前が？

シャイロック なつてはいかんのかね。ユダヤ人が、憂鬱に。

二人、椅子に座る。

シャイロック 水も出さんぞ。

アントーニオ 出されても飲まん。

シャイロック たいした礼儀だ。俺は飲むぞ。飲まんと思れんのでね。

シャイロック、葉を飲む。

シャイロック あくそつ。この葉の効き目だけを抜き取って苦味だけお前に飲ませて
やりたい。

アントーニオ お前はなぜ憂鬱だ？

シャイロック 知るものか。

アントーニオ まさかと思うが、明日の裁判のことが重く暗い雲となってお前の心にかかっているのではあるまいな。

シャイロック 何を言う。明日は俺の、そしてヴェニス中のユダヤ人の記念日だ。なにしろヴェニスの歴史始まって以来、初めて合法的にユダヤ人がキリスト教徒を殺せるのだ、こんな晴れがましい日はない。記念すべき日だ。歴史よ、明日を覚えておけ、だ！ 嬉しくて眠れぬことがあったとしても気鬱になどなるものか。なぜそんな途方もないことを考えた？

アントーニオ 万が一ということも思っただけだ。それならいい。

シャイロック 万が一？

アントーニオ そうだ。お前に限ってそんなことはあるまいとは思ったが、心によぎったのだ。もしやお前はこの人生という舞台の上で悪役を演じているだけなのではあるまいかと。お前のなかには憐みの情も良い心根も充分にあり、最後の土壇場でそれを見せて、どんでん返してもしようというのはないだろうか。

シャイロック ちよつと待て。お前はそれを望んでここに来たのではないのか？

アントーニオ 微塵も。

シャイロック 待て。お前の言うことは分からんぞ。頭がおかしくなったのではあるまいな。お前は俺に金を借りた。正確に言えばあのチンピラのバッサーニオに

アントーニオ バッサーニオを侮辱するな。

シャイロック (かまわず) あのとくでなしの無一文のバカ造に、俺は「三千ダカット！」の大金を貸した。誰もが「良い人」と口をそろえて言うお前、アントーニオを保証人に。三か月の期限付きで。それは分かっているだろうな？

アントーニオ その通りだ。バッサーニオへの言われのない中傷を別にすれば。

シャイロック (バッサーニオをかばう言葉にはかまわず) そのとき、俺は言ったな。利息はいらぬ、そのかわりおふぎけの証文を書いてくれと。「もしも期日までにこの金額をお返し願えない場合には、違約金代わりにあんたのからだの肉をきっかり一ポンをいただく、しかも俺の好きな場所から切り取っていい」

アントーニオ 間違いはない。

シャイロック 俺は言ったぞ。「これはただの冗談だ」と。

アントーニオ だが正式な証文がある。

シャイロック 俺は言った、「おふぎけの証文だ」と。

アントーニオ おふぎけだったのか？

シャイロック そうあってほしいんじゃないのか？

アントーニオ 俺の全財産は海の藻屑と消えた。今やこのヴェニス中の誰でも知っている。アントーニオは破産した。無一文だ。金の返せる当てはない。

シャイロック それによって俺は、お前を殺す権利を持っている。好きなところとあるからには必ず、心臓に最も近いところの肉を切り取ってやる。

アントーニオ いいだろう。お前の権利だ。

シャイロック なぜ、命乞いをしない！ なぜ俺の前に跪いて、「あの証文はなかったことにしてくれ」とみっともなく喚いて俺の足にすがりつかない。そうすりゃ俺は小躍りしてお前を罵り、お前に唾を吐き足蹴にし、すっかり気分が良くなってあの証文を破るかもしれんぞ。そうでなけりゃなぜ、先手を打って俺を殺してしまおうとしない。

アントーニオ お前ならそうするのか？

シャイロック 俺なら？ 俺ならそんな証文にサインなどしない。いや違う。俺なら、

バツサーニオのようならくでなしとは端から付き合わん。

アントーニオ 俺はお前を殺そうとは思っていなかった、さっきまでは。だが、バツサーニオを侮辱し続けるなら別だ。友を罵る男を打ち殺すのにナイフがいると思うなよ。

シャイロック バツサーニオがなにをした。放蕩をして自分の財産を使いつくし、それから今度はお前に借りた金を使いつくし、今また、恋する女のためにお前の命さえ危険にさらした男だぞ。

アントーニオ 違う！

シャイロック どこがだ！

アントーニオ バツサーニオは恋などしていない！

シャイロック (意外過ぎて驚く) そこか？

アントーニオ それ以外のことはお前の言う通りだ残念ながら。バツサーニオは確かに若者らしい放蕩から自分の財産を使いつくし、俺が貸した金も使いつくした。

シャイロック 若者らしい放蕩！ 物は言いようだ。ただの貴族の放蕩息子なら俺はあいつをこれほど目の敵にはしない。あの忌々しい「例のどんちゃん騒ぎ」のためだあいつが金を使ったのは。ヴェニス of 若者たちと一部の商人が集まっては黒人女や我らイスラエルの民に「制裁」とやらを加えてまわる、あの「例のどんちゃん騒ぎ」！ それに使った金だ、お前があいつにやったのは、胸糞が悪くなる。

あのバカな若者たちのお山の大将、バツサーニオは、そうしてできたバカな借金を恋する金持ち女と結婚することできれいにしようとした。その求婚のための資金ではなかったか、俺が貸したあの金は。

アントーニオ 確かに金持ち女に求婚するためだ、だが恋などしていない。

シャイロック どういうことだ、気でも違ったか？

アントーニオ 気が違ってなどいかなかったあいつは、だから恋などしていない。俺は訊いた「お前の恋の相手はどういう人だ」と。恋する男の答えは二つに一つ、黙るかしゃべるかだ。

シャイロック 恋してなくてもそうじゃないのか？

アントーニオ しゃべる男は浮かれた詩人だ。恋はどんな凡庸な男をも詩人にする。恋の

相手を聞かれれば、堰を切ったように言葉の波があふれだす。あふれた言葉はとどまる淀みもあらばこそ、激流となって流れ出し、相手の女性をほめそやす。彼女がどれほど美しいか、心根や教養がいかに素晴らしいかを、星だの花だの楽器だのありとあらゆる自然と芸術の美しさになぞらえ、女神のごとく賛美する。熱っぽい目に涙さえ浮かべ、赤くなったりにやにやしたりしながらな。

シャイロック、アントーニオの長口上にため息をつく。よきところで。

アントーニオ (淀むことなく続けて) 黙る男はふさぎの虫だ。恋の苦しさに夜も眠れず気鬱になって沈み込み、口から出るのはため息ばかり。

シャイロック 俺は恋などしてないぞ。

アントーニオ 安心しろ、分かっている。お前は恋など無縁だと。

シャイロック そう言われると逆らいたくなる。

アントーニオ お前のお相手は金だろう。

シャイロック おお金よ。俺はお前を愛している。俺にはお前が必要だ、俺はお前が欲しい、たとえ誰かから奪ってでもお前を手に入れずにはいられない。ああ、金よ金、

お前のいない人生はむなしく、楽しむことはない。俺の魂はお前を求めて取引所をさまよう。なのになぜ、金よ、お前は俺から去っていく…。

アントーニオ なかなかお前にふさわしい詩だ。

シャイロック どうでも金の亡者になりたいんだろう、キリスト教徒はユダヤ人を。

アントーニオ そう言いたいところだが、この商売の都ヴェニスでは、こと金を求めることに関しては宗教の違いはない。バツサーニオの相手も言ってみれば金だった。

あいつは俺に、開口一声、「一番の気がかりは借金の返済のことだ」と言ったのだ。恋の相手を聞いた問いに借金の答え！ そしてその返済の計画を聞いてくれという前置きで、「大きな遺産を持つ、ベルモントのポーシャ」とかいふ女の話をして出したんだ。あれが恋であるものか。

シャイロック 最低だな。結婚というものはもっと神聖なものだ。

アントーニオ 悪魔の口はときに意外な言葉を出すものだ。

シャイロック 一つだけ言っておく。ここは俺の家だ。俺たちはこの町でまっとうな市民の権利はない。そのくせ税金だけはごっそりもっていかれる。それでもこっちはそっちの法に従ってきた。どんなにこっただけが不利な法でもだ。だが、この家の中では俺が主人、俺が法だ。この家のなかでだけは、俺を悪魔と呼ぶのはやめてもらおう。神の名にかけて。

アントーニオ よかろう。訪ねたのはこちらだ。

シャイロック (独白) こいつのこういいうところが憎らしい。

アントーニオ なんだ？

シャイロック なんでもない。そう、結婚とは神聖なものだ。俺たちの目から見ればお前たちヴェニスの若いキリスト教徒こそ不埒だ。結婚は、親同士が決めた同じ民族の男と女が、病める時も健やかなる時も支え合い労わり合い、生涯を共にする神聖な誓いだ。親の借金のためならともかく、自分の放蕩のツケを結婚で返済しようなど、お前の親友はろくな男ではない。

アントーニオ 一瞬でも異教徒に言葉が通じると思ったのは間違いだった。親が決めた結婚だけが神聖か？ それでは恋はどこにある。

シャイロック 恋？ そんなものははしかだ。神に祈りを捧げるときに「アツバ、父よ」と祈るごとく、家の中のことは父親が決める、それが神の定めたもう秩序だ。

アントーニオ 律法主義者め。

シャイロック 褒め言葉と受け取ろう。お前たちキリスト教徒の無秩序こそ理解できん。今のお前はその最たるものだ。バツサーニオはろくでなしの浪費家だとお前は分かっている。しかしそれを言われると烈火のごとく怒る。バツサーニオは恋する金持ち女との結婚のために借金をしたと誰でも知っている。だが、その保証人たるお前はバツサーニオは恋などしていないという。今その借金の証文のためにお前は命の危機に陥っている。ところが命乞いもせず、俺に慈悲のないことを確認しに来たと言う。いったいどういうことだ。

アントーニオ 犬にキリスト教徒の考えを押し量れるものか。

シャイロック ではなぜこの家に来た？ 唾を吐くためか？

アントーニオ そうだ、唾を吐くためだ。

シャイロック 足蹴にするためか？

アントーニオ そうだ、犬を蹴飛ばしてどこが悪い。

シャイロック ではなぜそうしない、待て。バツサーニオの「例のどんちゃん騒ぎ」のこ

とを知るためか？

アントーニオ なぜ異教徒教のお前に我が親友のことを教えてもらう必要がある。

シャイロック 親友、家族、仲間には、見せない顔があるからだ。敵にだけ見せる顔が。

妻や母親、息子や娘が決して見ることのない、下卑た、残酷な、卑劣な顔。敵と呼ばれた民にしか、教えることのできない顔を、あの男が持っているからだ！ 教えてやろうか、あの男が

アントーニオ やめろ！

間。ほんの少しの。

シャイロック 当てが外れたか？ お前も、仲間が敵につけた傷は、見えないふりをする口か。

アントーニオ 事実に耳をふさぐのではない、聞きたくないのは親友への侮辱と中傷だ。
シャイロック お前が耳をふさいでいるのは事実にではない、侮辱されるべき親友の真実だ。

アントーニオ その汚れた口で、あともう一言でもバツサーニオを侮辱してみろ。俺は本
当にお前を殺すぞ。

シャイロック いいのか？ お前がここで俺を殺せば、お前を逃がした牢番も罪に問われ
るぞ！

間。

シャイロック (勝ち誇って) やはりな。お前にはこれが一番効くと思った。ざまあみろ、

これで俺は安心だ。殺す！ ハ！ 確かにお前がここに現れた時はそれも考えた、
だが、お前にはできない。なぜなら、お前は、アントーニオだからだ！ アント
ーニオは自分に同情した善良な牢番を罪に落とすことはできない、お前にはそう
いうことは絶対にできない。安全だ、俺は安全だ！ どうだ？ 俺はお前をよく
知っているだろう。ともするとお前の親友よりもずっと！ なぜと思う？ お前
が、俺の敵だからだ。はっきり言っておくぞ。俺はお前が大嫌いだ。第一にお前
はキリスト教徒だ、第二にお前は俺の商売の邪魔をした。

アントーニオ お前の邪魔をしたのではない。お前によって苦しめられている債務者たち
を助けただけだ。人に金を貸して利息を取るなど、そもそも聖書が禁じている。

シャイロック 禁じているのは聖書ではない、お前たちの教会、お前たちの法だ。俺はモ
ーセ五書の律法を破ったことなどない。貧しい者と同朋に貸した金で利息を取っ
たことなぞ一度もない。キリスト教徒は我らにとっては異教徒だ。異教徒から利
息を取ることを神は禁じておられない。

アントーニオ 人が人に金を貸すのはなぜだ？ 相手の苦境を気の毒に思うからだ。また
相手を信用するからだ。金を貸して利息を取るなどという商売が蔓延すれば、あ
らかじめ金のあるものだけが働きもせず、右から左に金を動かすだけで利益を得、
貧しい者は永遠に利息に縛られる。それは神の御心にそぐわない…詐欺師の仕事
だ。

シャイロック よくぞ悪魔という言葉を呑みこんだな。さすが「善意の人」アントーニオ」
と噂されるご立派なキリスト教徒だ。そういう立派な考えに影響されて、借金を
してでも遊びたい盛りの若者どもが、徒党を組んでこう言うのだ。「金貸しのユダ
ヤ野郎が神の御心にそぐわない詐欺師の商売で金を稼いで肥え太っているとい
うのに、俺たち若いキリスト教徒がなんだって遊ぶ金にも困っているんだ？」と。
キリスト教徒に利息を取ることを禁じたのはお前たちの法なのに、まるで俺たち
だけが特権を与えられたかのような言いがかりをつけ、集まっては大声で俺たち

の同胞を罵り、笑いものにし、唾を吐きかけ、店を壊し、年寄りを殴り、ユダヤ人さえいなくなれば町は清潔になると叫んでいる。そしてこの自由都市はキリスト教徒の無軌道の若者を捕えず、ユダヤ人の店の方を閉店させる。やっていないとは言わせないぞ。

アントーニオ すべての若者がしているわけではない。確かに…、グラシアノーなどは、乱暴で無軌道に過ぎると思えることもある。キリスト教徒として眉をひそめたくなることをしたとも聞いている、しかし…

シャイロック その連中に「若大将」と呼ばれている男だぞ、あのバツサーニオは。

アントーニオ バツサーニオの態度のどこに乱暴さや粗野がある、彼は、

シャイロック そうとも、あの男は美しい！ 見目が良く、ものごしも優雅だ。あの男が

グラシアノーを叱っているのを聞いたことがあるか？ 「お前の粗野な態度のせいで俺まで誤解されかねない」、いいや違う、あの男はさわやかで優雅な見た目、グラシアノーと同じ中身を誤解してもらっているような男だ！

アントーニオ 我慢できん、やはり悪魔と呼ばせてもらおうぞ、バツサーニオはそんな男ではない、断じて！ お前は…

シャイロック おれがどうしてランスロットをクビにしたと思う、あの男が黒人女を孕ませたという噂があったからだ、そのランスロットを雇って、お前に借りた金で晴れ着を作ってやるような男だ、バツサーニオは。

アントーニオ お前は、いびつな嫉妬心から妬んでいるのだ、バツサーニオのあの美しさ、優美さ、快活さ、賢さ、勇氣…

シャイロック ハッ！ 「例のどんちゃん騒ぎ」の無軌道な若者どもは、黒人の女を孕ませた話を往来で自慢気に笑いながら話すような連中だ。そのお山の大将だぞ、バツサーニオは！ あの男のどこを、お前は見ている！

ほんの少しの間。

アントーニオ どれほど美しいものもそれを映す鏡が歪んでいけば醜く見える。捻じ曲がったお前の心は、己のしている下劣な行為を隠すために彼らの行為をことさら貶めるのだ。そもそもお前たちが、金貸しなどという詐欺師の仕事に手を染めなければ、若者たちも反発などしなかった。なぜもつと、まっとうな商売をしない。

シャイロック 本気で言っているのか。お前ら若い連中は、歴史を学ぶことがなかったのか？ ローマの時代から、俺たちユダヤ人に許されていた仕事があったいくつかあったか知っているか？ 土地を持つ権利はない、決められた居住区以外には住めない、一度、国外に出れば二度と同じ国には戻れない。どれほど学んでも公の仕事にはつけない、政治家、役人、裁判官、判事、弁護士、土地持ちの農家、船持ちの漁師、職業芸術家…禁止された仕事ばかりのなかで、キリスト教徒

には禁じられた質屋と金貸しだけが、都会で家族を養える職だった。その仕事でわずかばかり成功すれば、ユダヤばかりが肥え太ると言われる。

アントーニオ わずかばかり、というのは謙虚に過ぎるのではないか？ 不平を言うのはお門違いだ。お前たちはまっとうな市民になることもできる。その権利を拒否しているのはお前たちの方だ

シャイロック お前たちのお得意な物語だ。異教徒はやつつける。そうでなければ、同朋を捨てて、すっかりこっちの仲間になるなら許してやると言う。だが改宗しても祖先の名前は残る。遠くアブラハムにつながる祖先を敬うことはイスラエルの民の誇りだ。だがその名前を指してお前たちは言う。「あいつはキリスト教徒に交じっているが、元はユダヤだ。本心からの改宗はしていない」そして異端審問にかけ、火あぶりにする。「異端」「魔女狩り」「悪魔祓い」とは良くも言った。そのなかにどれほどの数のユダヤ人狩りが混じっている、それも、本当のところは、財産の没収が目当てだ！

アントーニオ ス페인での異端審問の話は俺も聞いている。だが、ここはヴェニスだ。

古い因習にとらわれた頑迷な専制君主の国ではない。自治独立の自由都市だ。

シャイロック スペインと違ってこの国は宗教に支配されていない、自由な経済都市だから、差別がないと？ いいや、お前は分かっている。十二年前、この町が疫病にやられたあの悪夢の年、なぜ、俺たちユダヤ人にだけ外出禁止が言い渡された？ 俺たちユダヤが、ネズミを集めて町に放っていると噂されたからだ。だからユダヤ人は疫病にかからず、キリスト教徒だけが被害をこうむったと迫害された。冗談ではない、あの疫病でこの町でも百人が死んだ、医者も、俺の妻もだ！

間。ほんの少しの。

シャイロック だがなぜ、キリスト教徒には俺たちユダヤの犠牲が見えない？ 隠されているからだ。隠したい奴らがいるからだ。なぜ、自分たちの犠牲を俺たちユダヤのせいにする？ 恐怖からだ。恐ろしいのだ、キリスト教徒はユダヤ教徒が。宗教ではない、それは記憶だ。迫害した記憶のあるものは、迫害されたものたちを恐怖する。隠し、見えないふりをして、本当は知っているのだ、自分たちがしたことを。だから恐ろしいのだ。いつか報いを受けるのではないか、いつか復讐されるのではないかと。恨みを買っていると自覚する記憶がいわれのない恐怖となつて内臓に火をつける。「やられるまえにやってやる！」理性を焼き尽くす臆病者の感情が作る妄想。罪悪感に耐えたくない手の平返しが生んだ感情。キリスト教徒がユダヤ教徒にいだく、その無自覚な恐怖こそが、差別だ。

対峙する二人。